

ājagaraparvan における反宿命論

—— *Mahābhārata* 3.173-78 の一考察 ——

井 上 信 生

0. *Mahābhārata* (MBh) 3.173-78 は ājagaraparvan (大蛇の章) と呼ばれる。ここには「何者がバラモンなのか」をめぐる問答が収められている¹⁾。この問答を制したのは、varṇa を決定するのは生まれ(血筋・家柄)ではなく行いであるという主張であり、その際マヌ法典にも反駁が加えられる。ここには、造物主なり運命なりをもちだして諦めることをしない精神が窺われ興味深い。

1. 物語の主人公パーンダヴァ兄弟は長い追放期間にある。雪をいただく山岳地帯で²⁾、次兄ビーマが大蛇に捕われる。この蛇は実は呪われた王仙ナフシャである。長兄ユディシュティラは大蛇と問答し、バラモンとブラフマンに関する真実を語ってビーマの解放に成功する。ユディシュティラは大蛇から輪廻や自己などについて教えを受ける。呪いは尽き、ナフシャは昇天する。これがこの章の筋である。

2. ビーマは MBh の登場人物中でも一二を争う豪傑だが、ここでは大蛇に捕われて手も足も出ない。彼は兄弟や母を思って嘆きもするが、潔く運命を受け入れる：daivam puruṣakāreṇa ko nivartitum³⁾ arhati, daivam eva param manye puruṣārtho nirarthkaḥ. paśya daivopaghātād dhi bhujaṁviryavyapāśrayam, imām avasthām saṁprāptam animittam ihādyā mām 「運命を人のわざで反転させることがだれにできよう。運命にばかりは手が出せぬと私は思う。人間わざに意味はない。見よ。運命の一撃で、腕力が頼みの私が理由もなく今ここでこんなありさまになった」(3.176.27-28)。

3. 一方ユディシュティラは、不吉な前兆を見て弟の危機を察し、ビーマを食べようとする大蛇のもとに駆けつける。このとき蛇は、ユディシュティラに問答をもちかけ、回答次第でビーマを解放すると言う。蛇の問いは、バラモンにはだれがなるのか、知られるべきことは何かという二つである(3.177.15ab)。バラモンについてユディシュティラは、真実、施与、忍耐その他の徳をそなえた者のことだと述べる(3.177.16)。また彼は、知られるべきことはブラフマンだと言う(3.177.17)。以下本稿では、バラモン(ひいては varṇa というもの)に関する議論を

追う。

上のような答えに蛇は、真実だの施与だのという徳はシュードラのもとにも見られるのではないかと疑問を発するが (3.177.18), ユディシュティラは、徳のある行いが見受けられる人をバラモン、そうでない人をシュードラと呼ぶのだと強調する (3.177.20-21)。蛇は、それでは人の生まれ (jāti) は無意味になるのではないかと述べるが (3.177.25), ユディシュティラは意に介さない。彼のことはきわめてリアリスティックである: jātir atra mahāsarpa manuṣyatve mahāmate, saṃkarāt sarvavarṇānām duṣparīkṣyeti me matiḥ. sarve sarvāsu apatyāni janayanti yadā narāḥ, vān maithunam atho janma maraṇam ca samam nṛṇām 「思慮深い大蛇よ、人間であること⁴⁾において、ここで生まれというものは、あらゆるヴァルナが混じりあうことのゆえに、見てとることができないと私は思う。あらゆる男があらゆる女をあいてに子をなすとき、人々にとって、ことばと婚姻と誕生と死が共通だ [から、生まれなど分らない⁵⁾]」 (3.177.26-27)。

次にユディシュティラは、いささか唐突に「マヌのことば」を引く: prān nābhivardhanāt puṃso jātakarma vidhīyate, tatrāsya mātā sāvitrī pitā tv ācārya ucyate. vṛtṭyā sūdrasamo hy eṣa yāvad vede na jāyate, asminn evaṃ matidvaidhe manuḥ svāyambhuvo 'bravīt 「『へその緒を切る前に、男子には誕生儀礼が設定されている。その際、サーヴィトリーがこの子の母、師が父だと言われる。ヴェーダの中に生まれぬ限り、この者は行い次第ではシュードラに等しくなるのだ。』この二通りの考え (= 生まれが varṇa を決定するのか、行為が決定するのかという二説) において、スヴァヤンブーの子マヌはこう述べた」 (3.177.29-30)。29 と 30ab はマヌ法典に平行箇所をもつ。また、マヌを「スヴァヤンブーの子」とすることもマヌ法典と共通し、その呼称は同法典第1章の世界創造説に由来する。このテキストは「マヌ法典」(以下 Manu) を踏まえている^{6) 7)}。

29ab は誕生儀礼を扱う Manu2.29ab と同じであり、「サーヴィトリーが母、師が父」という 29cd の方は入門式に関わる Manu2.170cd に等しい⁸⁾。また「ヴェーダへの誕生」に触れる 30ab は、入門前後のことを述べる Manu2.172cd に対応する⁹⁾。法典の説くところでは、入門式での「ヴェーダへの誕生」によって dvija は sūdra と区別される。これは、父母からの生物学的な「生まれ」が varṇa を決めるという考えと同じではないが、個人の道徳的な「行い」を最重要視する立場にはやはり遠い。ユディシュティラの引用するマヌのことばの中には、「人は行い次第」という考えを反映する文言もあるけれども、その趣旨はあくまで儀礼に

よる（第二の）誕生の重視である。しかもユディシュティラは法典を端折るように引用していて、MBh3.177.29-30 をそのまま読むと、誕生儀礼のときに「ヴェーダの中に生まれ」とされているように見える¹⁰⁾。

そしてユディシュティラは、法典のそのような varṇa 論にも反対するのである： kṛtakṛtyāḥ punar varṇā¹¹⁾ 「けれども、すべきことをした人々が各ヴァルナなのだ」 (3.177.31a)。そしてはじめからの自説を繰り返す： yatredānīm mahāsarpa saṃskṛtaṃ vṛttam iṣyate, taṃ brāhmaṇam ahaṃ pūrvam uktavān bhujagottama 「ある人のもとで今、きちんとした行いが認められるとき、その人がバラモンだと私はさきに言ったのだ。大蛇よ」 (3.177.32)¹²⁾。ここにいたって蛇は納得し、ビーマを食べることを断念する (3.177.33)。

4. このテキストがマヌ法典を取り上げて否定していることは興味深い。マハーバーラタとマヌ法典の親縁性は学者の指摘するところだが¹³⁾、このようにマヌ法典に反論する箇所もマハーバーラタに存在している。

マヌ法典はスヴァヤンブー svayambhū という造物主を権威とする。varṇa も、究極的にはこの神に由来するとされる。生まれ(jāti)による varṇa を認めることは、創造神による秩序、ないしは神意、宿命に従うことになる。ここでユディシュティラがスヴァヤンブーの子マヌのことばに反対するとき、「定め」に屈服しない精神が発揮されている。運命を口にして死を覚悟するビーマがまったく無力で、ユディシュティラに救われるという筋立ては、このエピソードの作り手の考えをよく象徴している¹⁴⁾。

1) O. Strauss が “Ethische Probleme aus dem ‘Mahābhārata’” (1911) の第 6 章 (= *Kleine Schriften* pp.144-153) でこの問答を論じている。

2) 3.175.6; 176.30.

3) nivartitum for nivartayitum. Cf. T. Oberlies, *A Grammar of Epic Sanskrit*, p.253ff.

4) manuṣyatva ということばは、輪廻の中のほかの境涯と対比して人間を指すときに用いられることが多いが、ここでは jāti にこだわらずに人というものを指す概念になっている。

5) Nīlakaṇṭha: “vāgādīnām iva maithunasyāpi sādharāṇyāj jātir durjñeyā” に従った。

6) van Buitenen の訳は、マヌのことばが 3.177.31 であると誤解している。

7) MBh と Manu の関係については P. Olivelle, *Manu's Code of Law* (2005) p.23 を参照。

8) *Vasiṣṭhadharmasūtra* 2.3 にも対応する。

9) 文言が（ほぼ）同じなのは、*Vasiṣṭhadharmasūtra* 2.6 と *Baudhāyanadharmasūtra* 1.3.6.

10) Critical Apparatus によると、南方系写本の T と G では 29ab の後に挿入文があり、

(262)

ājagaraparvan における反宿命論 (井 上)

29cd を入門儀礼のときのことにしている。北方系写本にはそうした文はなく、南方でも M 写本の支持がないので、この挿入文は本来のものではないように見える。

11) S: sarva-varṇā (Tl:sa-varṇāya).

12) Strauss は、このエピソードのユディシュティラを基本的に「穏健派」と見なし (Kl. Schr. p.149), 3.177.32 については、おそらく Nilakanṭha に影響されて, “samskr̥tam vṛttam könnte auch verstanden werden als ‘ein von den Weihnen (Sakramenten) begleiteter sittlicher Wandel’. In diesem Falle würde Yudhiṣṭhiras Schluss-lehre sich wieder der orthodoxen Richtung nähern…” と述べている (p.152 n.3). だが、ユディシュティラが終始一貫して「急進的」立場にあると理解する方が無理がない。

13) 例えば、MBh にも Manu にもその成立の背景に、仏教の隆盛やアショーカ王の治世への正統ブラフマニズムからの反動があると指摘されている。J. Fitzgerald による MBh:Book 12 pt.1 英訳 (2004) への序文および, Olivelle [注 7] の序文 I.4 参照。

14) この思想的立場は、例えば、同じ MBh 第 3 巻所収の「バラモンと狩人の対話」(3.196-206) に見られる考え方と対照的である。このエピソードでも、varṇa を決定するのはあくまでも行為であるという考えがはっきりと述べられているが、その一方で、生まれにもとづく社会的役割の遵守も強調されている。その際、「造物主による定め」が根拠とされている。井上信生「バラモンと狩人の対話」『インド思想史研究』15 (2003) pp.71-78 を参照。

〈キーワード〉 マハーバーラタ、マヌ法典、バラモン、運命

(大阪大学文学修士)

新刊紹介

立川 武蔵 著／大村次郷 写真

『ヒンドゥーの聖地』

A5 版・124 頁・本体価格 2,300 円
山川出版社・2009 年 3 月